

「穂肥診断を必ず実施」、適期適正に穂肥を施用しましょう！

1 穂肥時期のめやす（分施体系）

・中生品種の出穂期は「**前年より3日程度早い**」、晩生品種は「**前年並み程度**」の予想です。

品 種	出穂期のめやす	1回目穂肥		2回目穂肥		合計窒素量※ (kg/10a)
		時 期	出穂期前日数	時 期	出穂期前日数	
こがねもち	7/27 頃	7/9～7/12 頃	18～15	7/17 頃	10	1～3
コシヒカリ（平坦地） （中山間地）	7/30 頃	7/12～7/15 頃	18～15	7/20 頃	10	1～3
	8/6 頃	7/19～7/22 頃		7/27 頃		
にじのきらめき	8/6 頃	7/7～7/12 頃	30～25	7/23 頃	14	2～5
新之助	8/4 頃	7/14～7/17 頃	21～18	7/23～7/25 頃	12～10	0.5～3
みずほの輝き	8/10 頃	7/16 頃	25	7/27 頃	14	3

○稚苗 5月10～15日頃、
中苗 5月15～20日頃
の移植を想定
○穂肥時期は化成肥料
の使用を想定。

※合計窒素施用量を
2回に分けて施用する。

注）出穂期はほ場間で差があり、今後の天候等によっても前後します

2 コシヒカリの生育診断

（1）2回目穂肥の診断めやす（出穂12日前頃）

出穂14～12日前の葉色（単葉）	2回目の穂肥量（10a当たり）
SPAD値 35未満（葉色板 4.6未満）	基準量どおり施用（1.0～1.5kg）
SPAD値 35以上（葉色板 4.6以上）	施用量を減らす（0.7～1.0kg未満）

- ・高温・多日照が予想され、葉色が急激に低下する可能性があります。
- ・葉色が濃く、1回目の穂肥をしなかった場合も、登熟期間の後期栄養確保のため、2回目の穂肥は確実に施用しましょう。

（2）出穂期10日前以降の穂肥（3回目）の対応

・登熟期間が高温と予想され、葉色が淡い場合は、以下を参考に3回目穂肥を施用しましょう。

施肥体系（基肥＋穂肥）	判断時期	葉色のめやす	施用する肥料	施用時期	施用窒素量(kg/10a)
慣行栽培（化学肥料体系）	出穂期3日前の葉色 ※単葉の測定値	SPAD値 31以下 葉色板 4.0以下※	化学肥料	出穂期3日前	1.0kg/10aを上限
特別栽培（減化学肥料体系）	出穂期6日前の葉色 ※単葉の測定値	SPAD値 33以下 葉色板 4.5以下※	有機50%肥料	出穂期3日前	1.0kg/10a（特栽米の上限に注意）
			有機100%肥料	出穂期6～3日前	1.0kg/10a

（3）基肥一発施肥体系の対応

- ・基肥一発肥料の場合、分施体系の穂肥施用時期に飽水管理を徹底し、土壌中の水分を保持する。
- ・出穂後に高温が予想される場合、葉色の推移に注意し、出穂期の葉色（SPAD値）が32～33を下回ると予想される場合には、出穂期10日前までに窒素成分で1.0kg/10a追肥を行う（特栽米の場合は、化学由来窒素成分の上限に注意）。

3 今後の水管理

（1）飽水管理の徹底で稲体の活力を維持

- ・高温下での継続した湛水は、根腐れの発生につながるので引き続き、田面が濡れた状態を維持しましょう。

（2）異常高温、強風フェーン時の水管理

- ・異常高温、強風フェーン時は速やかに湛水し、稲体からの急激な蒸散による障害（白穂や着色粒、稔実障害等）の発生を防ぎましょう。
- ・湛水深は可能であれば3cm以上（フェーン時に湛水状態が保たれる深さ）としましょう。フェーン通過後は落水し飽水管理に移行します。
- ・ただし、高温・乾燥が2日以上続く場合は、ほ場の水温上昇を抑えるため、こまめな 水管理を行いましょう。

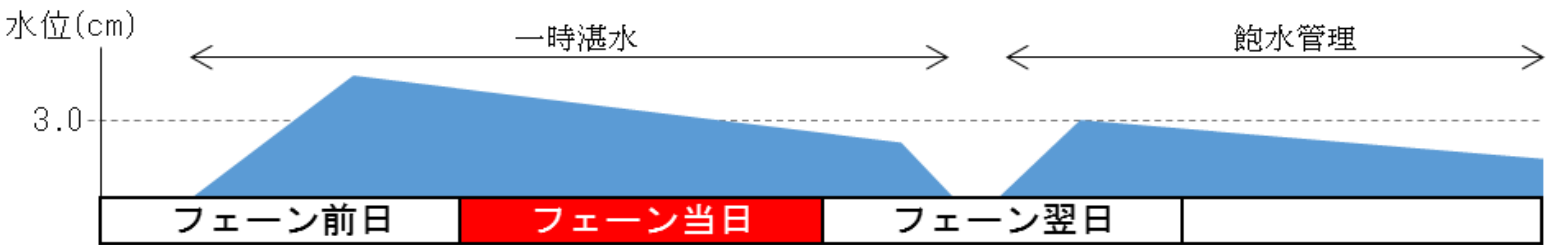


図 短時間（1日以内）のフェーン時の水管理

4 斑点米カメムシ類による斑点米発生防止

各地の予察調査では、斑点米カメムシ類の確認地点が多く、斑点米の被害が心配されますので、以下の対応をお願いします。

- ・斑点米カメムシ類の多くは出穂したイネ科雑草を好むので、種子が結実しない間隔で草刈りする。
- ・薬剤防除の場合、剤型（粉剤、液剤、粒剤等）により散布適期が異なるので、剤型に応じた適期に散布する。
- ・斑点米常発地で共同防除より出穂期が7日以上早い品種では、共同防除前の追加防除が有効である。

【主な斑点米カメムシ類】



お問い合わせ先（TEL） JA えちご上越 頸北わかば営農センター ：025-530-3000

アカヒゲホソミドリ
カスミカメ

アサスジカスミカメ